

平城京左京二条二坊五坪の調査(平城第636次)

平城京左京二条二坊五坪は、南は二条大路に面し、平城宮東院の南に位置することから東院南方遺跡と呼ばれています。いわゆる二条大路木簡の内容から、当該地は藤原麻呂邸であった可能性が指摘されています。2021年3月に、建物建設にともない五坪の西南隅で45㎡の発掘調査を実施しました。その結果、予想どおり表土直下から多くの遺物と遺構を検出しました。地層の堆積も非常に良好で、3面の整地土上で合計8時期の遺構変遷を確認しました。最下層の南北塀は出土した軒瓦から天平期まで遡り、最上層の瓦溜は奈良時代後半期のものです。このうち5時期にわたり、溝や塀等の南北方向の遺構を確認しました。とりわけ南北掘立柱塀を5時期分6条検出したことから、本調査地点では、坪内を東西に区分するための遮蔽施設が繰り返し構築されたことがわかります。

その中間の4時期目では、その前後と全く異なる性質の遺構を検出しました。それは周囲に溝を巡らせて、一辺が1～2mの格子状の区画を造るいわゆる方形区画遺構と呼ばれるものです。近年の平城宮東院やコナベ古墳南方遺跡等の調査成果から、竈^{かまど}に関わる遺構の可能性が指摘されています。このことから、当該地では南北方向の遮蔽施設が奈良時代を通じて繰り返し構築されていましたが、4時期目のみそうした区画ではなく、厨^{くりや}の性格をもつ施設が広がっていたことが新たにわかりました。

(都城発掘調査部 国武 貞克)



奈良時代前半の南北掘立柱塀(写真右の柱列)